

---

# 青い薔薇

音無 無音

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

青い薔薇

### 【Nコード】

N2687R

### 【作者名】

音無 無音

### 【あらすじ】

僕の彼女は、重くて、重くて。重い、病気でした。そして、彼女は薔薇を。。

「健ちゃん」

彼女は言った。

「何？」

僕は、最後まで彼女の願いを叶えようと思う。

そして、彼女は。

こう言った。

彼女の病気が診断され、とても、重いものだと、彼女の両親から伝えられた。

重度のガンだという。

治る、余地はないらしい。

だから、僕は。

最後まで。

最期まで。

彼女のそばにいて、彼女を……。

それから、毎日病院に通った。

一日三度の面接時間があれば、全て行った。

「またきたの？健ちゃん暇なんだね」

と、ほほえみかけてくれる、彼女のもとへ。

重い、重い、病気、なのに。

ある日行くと

病室から咳が聞こえた。

「ごほっ、ごほっ」

彼女の、ものだった。

僕はわざと、遅く面接した。

もちろん、看護師さんたちに告げてから。

「あれ、健ちゃん。今日は遅いんだね」

「うん、ちよっとそこで知り合いに会って」

嘘をついた。

「そつか。じゃ、その知り合いの人も誰か入院してるのかな？」

やめろよ。

追い詰めないでくれ。

「・・・・・・・・・・、さあ、ね」

僕は息が苦しかった。

胸が痛かった。

泣きたかった。

そしてまた

「ちよっと用があるから今日はもう帰るね。はい、これ。花。」

嘘を、ついた。

花はうちの母が大切に育てていたバラだった。

それは、青々しい、バラ。

「・・・・・・・・・・、ねえ健ちゃん。青いバラの花ことば、知ってる

？」

「え？」

その言葉に足を止めた。

「いくつか、あるんだけど。『神の祝福』『奇跡』『夢、叶う』だ

よ。」

僕はその真実を疑った。

母の陰謀なのか、偶然なのか。

「ありがとね」

そう言っている彼女を背に僕は部屋から出た。

るる、と。

帰ったばかりの僕に携帯が呼びかける。

「もしもし？」

出た相手は、彼女の母親。

「・・・・・・・・・・・・・・・・、え？」

内容は、彼女の命日がつきりしたことだった。  
あと。

一週間。

それから。

僕は毎日通う。

嘘もつかず。

遅くならず。

現実を、見た。

残り三日となった今日。

彼女はベッドに寝たきりだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一言も、しゃべらなかつた。

部屋には、枯れたバラがあつた。

僕は今日、バラを持ってきたので入れ替えてあげた。

「それ、飾らないで」

戸棚に置いたところで、彼女は言った。

「どうして？ 綺麗じゃん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それ以上彼女は話さなかつた。

なんとなく、飾りたくない理由は、わかつた。

だけど、僕は。

あえて、僕は。

そのバラを。

飾つた。

「僕もう帰るね。何か欲しいモノない？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・、健ちゃん」

「？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・何でも無い」

「そう。おやすみ」

「おや、すみ」

僕は部屋の電気を切つた。

翌日、僕は学校を休んだ。

彼女の両親に、来てくれと、言われたから。  
容体が悪化したそうだ。

僕が付いた頃には落ち着いていたし、  
ほほえみを、僕にくれた。

「健ちゃん、あのね」

「なんですか、おばさん」

「今日が、やまなんだって」

「え．．．．．？」

僕は、バラを落とした。

そのバラも、青かった。

「だから、ずっと、いて、あげて、ちょうだ．．．．．」

「．．．．．僕にできることなら何でもしますよ」

僕は、ぎゅっと、拳を握った。

見舞い人が座るイスに座った。

「どうしたの。学校は？」

「休んだよ。」

「どうして？」

「．．．．．」

「そんなに、私の死に目に会いたいの？」

「ち、ちがつ！」

「．．．．．、ううん。いいの。居て。本当は、怖いから」

震えた声で。

「分かった」

いっぱい話した。

いっぱい笑った。

いっぱい泣いた。

いっぱい、いっぱい。

君を。

「うっ」

彼女は苦しそうに胸を抑えた。

「!？ 誰か呼ぼうか？」

「い、いいの。こ、れでおわ、りだから」とぎれとぎれの声で。

微かに。

泣きそうな。

「だめだ！誰か呼ばなきゃ！」

「けん、ちゃ・・・・・・・・・・、最期まで、いつしょ・・・・・・・・に」「！」

『だからずっといてあげて』

両親の言葉を思い出した。

「・・・・・・・・・・、僕にできることなら何でもするから、言って」

「て、かし、て」

“左手を”差し出す彼女に僕は“左手を”差し出した。

「ふふ。もっと、遊びたかったな」

「まだ遊べるさ」

「そうだね。生まれ変わったら、健ちゃんのお嫁さんになりたいな」

「まだなれるさ」

僕が、震えている。

瞳が熱くなるのが分かった。

「健ちゃん？」

「あ、なんでもないよ」

ごまかす。

「これ、あげるね」

貰ったのは、折り紙で折った赤いバラ。

「うふふ。」

彼女の笑みは。



とても、綺麗だった。

「あり、がとね。健ちゃん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・、どういたしまして」

「えへへ。じゃ、ほっぺにチューして？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕は彼女に従った。

「うふ、これで後悔はないかな」

「そんな、怖いこと言っなよ」

「いいんだ、げほっ、あたしには、分かってる」

げほ、げほ、と咳き込む。

そして。

ご両親が駆けつけた頃には、息を引き取っていた。

「あ、ああああっ」

「母さん。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ありがとっ、健くん」

「いえ」

「健ちゃん」

「何？」

「最期に、言っておくね」

「いっぱい、いっぱい、いっぱい。」

「健ちゃん」

君を　君を　。

「愛してるよ」愛してる。

僕は彼女からもらったバラを見た。

赤い、バラ。

裏に、文字があった。

『赤いバラの花ことは  
』

「私はあなたを愛する、だよな」

僕はそれをポケットに突っ込み、家へ向かった

。

（後書き）

左手握手には  
さようなら、という意味があります。  
親父によれば。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2687r/>

---

青い薔薇

2011年10月3日11時24分発行